

再び恋に落ちたシェイクスピア

伊井直行

1 劇場の舞台袖。劇作家ジョン・フレッチャーが、共作者のフランシス・ポーモンと共に舞台を見ている。舞台では、男たちがやりとりをしている。

「結局、払うものは払って、気合いを入れようとしたんだ」

「それで、それで」

「なんと、乙女でもあるまいに、痛くしたら泣いちゃうから、だと」

観客席が沸く。フレッチャーが満足そうにポーモンの顔を見る。

「ほら、下ネタを入れて良かっただろ。客の食いつきが違う」

ポーモンは肩をすくめ、舞台袖から立ち去ろうとする。

「フランシス」

フレッチャーが呼びかけるが、ポーモンは歩みを止めない。

フレッチャーは苦笑いを浮かべて舞台に向き直る。視線は、大笑いしている観客席に向けられる。中でも、一人の男性に集中する。男性は連れの男性と一緒に笑っている。しかし、その笑いはどこか冷めているようでもある。

2 劇場出口。出ていく観客たち。先ほどの男性と連れがその中にいる。親しげに会話しながら歩く二人。後ろからフレッチャーが近づいて呼びかける。

「ミスター・シェイクスピア。ミスター……」

シェイクスピアが振り返る。フレッチャーの顔を見て立ち止まる。

フレッチャーは会釈する。

「ミスター・シェイクスピア、お越しいたゞき、ありがとうございます」

「久しぶり」

「ストラトフォード・アポン・エイボンにお帰りになったやに聞いていました」

「帰ったさ」連れの男性が口を挟む。「けれど、奥様の元では居心地が良すぎて、すきんだロンドンの町が恋しくなるらしい」

フレッチャーは連れの顔を見て表情を変える。片足を引いて頭を下げる。

「サウサンプトン伯……お越しいたゞき、光栄です」

サウサンプトン伯ヘンリー・リズリー。かつてシェイクスピアが愛のソネットを捧げた相手と噂される。ヘンリーはフレッチャーの言葉など聞こえない素振りです。歩いて歩き出そうとする。

フレッチャーがシェイクスピアにたずねる。

「芝居は、お気に召しましたか？」

ヘンリーは足を止め、振り返る。

「お気に召すわけないだろ。こいつが気に入るのは自分の芝居だけだ」

シェイクスピアは苦笑いで顔を左右にふる。

「だが、心配するな。ウィリアムはもう芝居は書かない。で、自分以外のクズの中では、ジョン・フレッチャー、お前とフランシス・ボーモントのコンビはましな方だとき」

ヘンリーが歩き始める。シェイクスピアが続く。なお話しかけるフレッチャー。

「ミスター・シェイクスピア、折り入って、ご相談したいことがあります」

シェイクスピアは歩みを止めない。

「ご覧の通り、サウサンプトン伯とつきあわねばならん」

「では、後日に」

シェイクスピアは返事をしない。

「週末、宮廷で国王一座による『ハムレット』がかかります。ご覧になる予定は？」
シェイクスピアの足が止まりそうになる。

「私は当日招かれて、というか、呼びつけられております」とフレッチャー。

「宮廷に招かれた？ 芝居のことですか？」とシェイクスピア。

うなづくフレッチャー。

「私も招かれてはいる。行くかも知れない。行かないかも知れない」

「必ず、お目にかかりたく存じます」

フレッチャーは立ち止まり、二人の後ろ姿を見送る。

3 劇場から続く賑やかで不潔な通り。シェイクスピアは早足でヘンリーに近づく。

「ハムレット、ハムレット……。なんで今更ハムレットなんだ？」

「俺にきいているのか？」

「いえ。ただ不思議だと思っております。あのように暗い芝居……」

「国王陛下のご所望らしい。陛下が、陰鬱な悲劇をお好みだと聞いたことはなかったが、なかなかの芝居通であることは確かだ。不思議ではない」

ヘンリーが続ける。

「ハムレットはシェイクスピアの最高傑作だと思う。お前は違うのか？」

「最高ではございません。最高の一つです」

「リア王はいい芝居だ。だが、結末がつらすぎる。ハムレットの死は観客を一つにする。だが、リア王は最後の最後に全員を孤独の内に放り出してしまおう」

「夏の夜の夢を見れば、みな幸福になれます」

ヘンリーは立ち止まる。

「喜劇で観客が幸福を味わうのは当たり前だ。最高の芝居は、悲しみの奥底で人に生きる価値を思
い出させる悲劇だ。ハムレットだ」

シェイクスピアが言う。

「最高の喜劇は最高の喜劇、最高の悲劇は最高の悲劇、比べることはできません」

「自分で喜劇を持ち出したのではないか……ならば、悲劇にして喜劇、流行りの悲喜劇こそが最高中
の最高だとも言うのか？」

「そうなれば、当然、当代悲喜劇の第一人者、ジョン・フレッチャーとフランシス・ポーモントのカップルこ
そ、イングランドの演劇史上、最高の劇作家にてございましょう」

シェイクスピアは深々と礼をする。皮肉な笑みを浮かべて。

ヘンリーはシェイクスピアの目を見る。

「ウィリアム、お前は自分で書いておきながら、ハムレットが嫌いなのか？」

視線を逸らすシェイクスピア。

「私はかつてハムレットを書きました。今の私は、かつてハムレットを書いたことのある男に過ぎません」
シェイクスピアは一旦、言葉を止める。ため息をついたようでもある。

「私は最早ハムレットを書けません。どうやって書いたのか、思い出すことすらできないのです。しかし、そ
れもどうでもよいこと。ハムレットは、私にとって、とうに消え失せた過去に過ぎません。それなのに、宮
廷は、まるで昨日書いた作であるかのようにハムレットを持ち出して来ました。迷惑千万です。まるで
失った恋人の残り香を無理にかがされるような……迷惑どころか、むしろ拷問です」

ヘンリーはシェイクスピアに寄り添う。二人は肩を並べて歩き出す。

4 フレッチャーとポーモントが同居する部屋。言い争う二人。

フレッチャー「宮廷から直に話が来たんだ。国王一座の座付き作者の筆頭になる千載一遇のチャンスなんだぞ」

ボ「モント」そりゃ結構な話だが、俺には関係ない。俺は二度と芝居に関わることはない。何度訊かれても同じだ」

フ「宮廷での公演の話は知らなかっただろう？ 俺だって今日初めて聞かされた」

ボ「俺には関係ない。宮廷からだろうと、同じことだ」

フ「お前にはそうでも、俺にとっては違う。ここでコンビを解消したら、せつかくのお招きが無になるやもしれん。最後の一度で構わない。今回だけは一緒にやってくれ」

ボ「無理だ。芝居の世界とは縁を切る。婚約者にそう約束した」

うつむくフレッチャー。

ボ「おまけに演目を指定されて、それがドン・キホーテとは、みくびられたもんだ。そんなもの、見世物にしかなるまい」

フ「みくびられたわけではない。俺がスペイン語ができて、英訳が出版される前からドン・キホーテを読んでいたと、そんな話を陪臣の誰かが聞いたようなのだ」

ボ「他の作者に断られて、お鉢が回って来たのだろう。おちゃらけた三文小説を元に劇を書きたいやつなんて、そうはいない。俺も以前に少し読んだことがある」

フ「すこぶる面白いだろ？」

ボ「そして、すこぶる下らん。お前は、ドタバタ喜劇の作者になりたいのか？」

フ「まさか。確かに、並の手腕ではまともな演目にはならない。だからこそ、フランスス、お前の助けが必要なんだ」

ボ「無理。芝居に未練はない。俺は自分がシェイクスピアになれないと分かったんだ。ジョン、お前もだ。だが、お前はまだ希望を持っている。希望を持つ者に扉は開かれる……かもしれん。幸運を祈る」

シェイクスピアの名にびくりとするフレッチャー。フレッチャーが言葉を継ぐ前に、ポーモンはベッドに入る。フレッチャーは肩をすくめる。そして同じ寝床に潜り込む。二人は互いに背中を向け合って寝る。

5 深夜、シェイクスピアは居室に戻る。月明かりのさす窓辺での独白。

「俺はペンの持ち方を忘れてしまったも同然だ。ハムレットどころか、求めに応じて乱造した程度の作ですら、今は書けそうにない。麗しく、また禍々しい言葉を際限なく産み出した俺の頭の中の井戸は涸れ果てた」

月に目をやるシェイクスピア。

「あれはまさしく黄金の井戸だった。だが、なくなったところで惜しくはない。口から吐き出された途端、右から左に消えて行く空しい言葉の黄金など、最初からあってないようなもの。代わりに手で触れることのできる本物の黄金を手に入れた。俺はかねて劇作だけでなく、劇場の権利を手に入れるためにも精一杯力を尽くした。故郷に値上がりしそうな不動産があれば、稼いだ金を抜け目なく投資した。貧乏な劇作家連中は、そんな俺の生き方が理解できないようだった。今やみな俺の成功をうらやましがっている。言葉の黄金は本物の黄金にかなわない。フレッチャーが俺に相談したいのは、金の無心だろう。宮廷の陪臣に気に入られようとする金がかかる」

窓を閉めるシェイクスピア。

「それにしても、サウサンプトン伯がハムレットをお気に入りとは。以前はそうではなかった。ハル王子とフォルスタッフが好みだったはず。あの恐ろしい経験が、あの方のものの見方を根底から変えてしまったのかもしれない」

6 サウサンプトン伯の過去。シェイクスピアら芸術家のパトロンとして、華やかな生活。王宮での立身と策謀。反乱。武闘。虜囚となり、裁判を受ける。かろうじて命は助けられるが、ロンドン塔幽閉の身

に。牢内で猫をなでるサウサンプトン伯。エリザベス女王の死。ジェイムズ王により解放され、地位を回復。シェイクスピアとの再会。

7 王宮内。ハムレットが始まろうとする頃、シェイクスピアが現れる。最後方の立ち見の中に紛れようとするが、王の従者によって最前列の一席に誘われる。王の視線に気づき、頭を下げるシェイクスピア。王の後方からその様子を見ている青年。横に、顔を隠した妙齡の婦人。婦人もシェイクスピアに視線を向け、見つめる。

8 ハムレットの舞台とシェイクスピアの顔が交互に。シェイクスピアは落ち着かない表情だったが、次第に打ちのめされ、青ざめていく。

「こんなものを、俺は書いたのか。どうやったたら、こんなものが書いたのか……」

後方の席で夢中になっている若い女性。その横にはサウサンプトン伯。伯も魅入られている。しかし、観客の中には退屈して眠りそうになったり、秘かに席を立ち後方であくびをしたりする者も。一方、先ほどシェイクスピアに視線を向けていた青年は目を輝かせ、舞台に集中している。王は、妙齡の婦人の反応を気にしている。婦人は王の視線に気づかない。彼女も劇に熱中しているのだ。
劇は続く(フェイドアウト)。

9 舞台の終わり。シェイクスピアは呆けたように座り込んでいる。しかし、国王が席を立ったので、立ち上がる。深々とお辞儀した後、再び座り込む。

女性の声が聞こえる。

「ロミオ、ロミオ……」

シェイクスピアは驚いて、我に返る。

「あなたはなぜロミオなの？」

立ち上がり、後方に向き直るシェイクスピア。かつて愛し合った女性が二十年の後、さらに美しさを増してそこにいた。

「ヴァイオラ」

「ウイリアム」

見つめ合う二人。

「ウエセックス公は病気で亡くなられたと聞きました。その後もアメリカに留まっていたのですよね？」
うなづくヴァイオラ。

「運命の気まぐれで、不運にも幸運にもたくさん出遭いました」

「私も同様のようです」

ヴァイオラはシェイクスピアの顔を見つめる。

「あなたは十二夜という劇で、ヴァイオラの乗った船を難破させたでしょう？」

「ええ。けれどヴァイオラは助かり、最後に幸福を得ます」

微笑 えみを交わす二人。

「アメリカから、こちらに戻ることにしたのですか？」

「いいえ。しばらくの滞在です。良い船があれば戻ります。あちらに家族を残しています」

「家族？ ウエセックス公が亡くなった後に再婚をした？」

ヴァイオラが答える前に、近づいて来た青年が声を発する。

「母上」

驚くシェイクスピア。

「ご紹介ください」

「ミスター・シェイクスピア、息子のリチャードです」

「ミスター・シェイクスピア。母から、ロンドンの演劇がどんなに素晴らしいか、何千回も聞かされてきました。名台詞の数々を交えて。けれど、こちらで見た実物は想像を超えていました。中でもハムレット、悲劇という夜空に輝く、月の光にも勝る宝石です。ミスター・シェイクスピア、あなたに会えて光栄です」

微笑むヴァイオラ。

「芝居好きの血が受け継がれたようです」

「芝居好きの血……？」

「もちろん、私の血です」

シェイクスピアはリチャードの顔を見る。

国王の従者が近づいて来る。

「ヴァイオラ様、国王陛下がお呼びです」

会釈して立ち去ろうとするヴァイオラ。

「どちらに滞在していますか？」

ヴァイオラは一瞬だけ振り返る。

「実家におります」

10 宮廷から人々が去っていく。シェイクスピアはフレッチャーを見つめる。国王一座の重役と話している。シェイクスピアはそのまま立ち去ろうとする。

ポーモントが華やかな身なりの女性と近づく。

「ミスター・シェイクスピア、先日は私どもの芝居にお越しくださったとのこと。ありがたく存じます」

うなづくシェイクスピア。

「お気に召しましたか、などとは口が裂けても申しあげられません。今日の素晴らしいハムレットを見た

後では」

シェイクスピアは女性を見る。

「こちらは？」

「婚約者です。間もなく結婚いたします」

「フレッチャーとはカッブル……コンビを解消か？」

「そうです。私は芝居の世界から離れます」

フレッチャーと婚約者が顔を見合わせる。微笑む婚約者。

「脚本書きをやめると？」

「未練はありません。ミスター・シェイクスピア、私はあなたに憧れて芝居の世界に入りました。経験を重ねて分かったのは、フレッチャーと力を合わせても、到底ハムレットのような芝居は書けないということでした」

「君らの悲喜劇は、大層人気がある。客の受けなら、ハムレットに優るだろう」

「人気をあてに右往左往する人生は終わりです。十分堪能しました。つい先日、国王一座から、私どもに依頼がありました。なんとドン・キホーテを題材にせよとのご注文。ドタバタ喜劇がご所望というわけです。フレッチャーは引き受けるつもりです。またとないチャンスだからと。私は、芝居から足を洗う決心をしておいて良かったと思えました。下卑たおちゃらけ芝居と関わらずにすみませうから」

シェイクスピアはフレッチャーの方をうかがう。フレッチャーもシェイクスピアに視線を向ける。

「私はそろそろ引き上げよう」

「お引き留めしました。芝居人生の最後に、尊敬するミスター・シェイクスピアと共にハムレットを見ることができたこと、生涯、忘れません」

シェイクスピアは小さく手をふりつつその場を離れる。

11 夕暮れ。賑やかな居酒屋。カウンターで一人飲むシェイクスピーア。壁には夭逝した劇作家クリストファー・マーロウの肖像。居酒屋の老店員とマーロウの昔話をするシェイクスピーア。フレッチャーが現れ、シェイクスピーアに挨拶する。フレッチャーもマーロウの話に加わるが噛み合わない。沈黙の後、フレッチャーは、シェイクスピーアの気分を害することを恐れて、ためらいながら共作の話を持ち出す。

「国王一座の公演という晴れの舞台にお力を貸して欲しいのです」

「ふむ。そういうことか」とシェイクスピーア。「フレッチャー、私はもう芝居は書かないのだ」

「ポーモントから何かお聞きになりましたか？ 彼は、ミスター・シェイクスピーアに憧れる余り、筆を折るところまで真似しようとしています」

「ポーモントは清清していたぞ」

「婚約者の実家は大金持ちです。さぞ気分がよいことでしょう」

「そういう意味ではない。彼は注文されたドン・キホーテをやらずにすむことを喜んでいたので」
フレッチャーはひるんだ表情になる。

「よりによって、ドン・キホーテとは！ 読んだことではないし、読みたくもない。金だらいをかぶった頭のおかしい騎士と、豚飼いの従者の馬鹿騒ぎだというではないか。もし筆を断っていなかったとしても、たとえ国王陛下からの直の命令であったとしても、ミスター・フレッチャー、私はドン・キホーテを芝居にするような馬鹿な真似はしない。決して、決して、だ」

シェイクスピーアは席を立つ。フレッチャーは後を追おうとして諦める。

12 夜。ヴァイオラの実家。かつて通った裏口からヴァイオラの部屋のバルコニーの前に行く。シェイクスピーアが声をかける。

「ジュリエット」

しかし、顔を出したのは年老いた乳母だった。

「ミスター・シェイクスピア。玄関にお回りください。奥様とリチャード様がお待ちです」

訪問の約束はしていないが……つぶやきつつ玄関に行くシェイクスピア。リチャードが前に立ち、ヴァイオラは後方で微笑んでいる。

「ミスター・シェイクスピアは必ずいらっしゃる。母が予言しました。その通りになりました」

デ・レセップス家では既にヴァイオラの弟の代になっている。弟は商用で長期の出張中。ヴァイオラが自ら渡米後のことを話す。

13 ヴァイオラの話。ウェセックス公は新大陸に到着して間もなく病を得、リチャードの誕生後に亡くなる。ヴァイオラも妊娠、出産で生命の危機に陥り、一年近く床に伏していた。その間、タバコ農場経営のためイングランドから公の従弟がやって来て、傾きかけていた農場を立て直す。従弟は経営には厳しいが、控えめな人柄の穏やかな紳士だった。

農場が軌道に乗ったので、ヴァイオラとリチャードはイングランドに帰ることにする。しかし、十二夜のように激しい嵐に巻き込まれ、難破した船から母子は奇跡的に助け出される。ヴァイオラはアメリカに留まることにし、公の従弟の求婚を受け入れる。母子は航海への恐怖を克服するのに十年以上の歳月を要し、ようやく先月ロンドンに帰って来た。

14 「ウィリアム、あなたのその後について、私は何も知らないわけではありません。あなたは以前に倍する素晴らしい劇作家になったのですね。ロミオとジュリエット、私は天才の仕事だと思いました。でも、ロンドンから送ってもらったハムレットとリア王の刊本を読んだら、なんと恐ろしい悲劇でしょう！ 生きてい

ることが心底恐ろしくなりました。しかし、涙の中で、今こうして生きていることがとても大切なことのようにも思えて来るのです」

「読むだけでも素晴らしい劇です」リチャードが言葉を挟む。「でも、芝居として上演されると、ミスター・シェイクスピアの書かれた言葉が天空の星々のように輝き出します。言葉の放つ光が目に見えるようです。国王一座の俳優たちは、まるで鬼神です。しかし、彼らはみなあなたの言葉に操られているのです」

ヴァイオラが言葉を発する。

「ウイリアム、あなたもまた不運と幸運とを経験したとおっしゃいました。恐ろしいほどの傑作を書いたのは、もしかや、あの悲劇にも匹敵するつらい運命に遭遇したのでは、と想像もしたくないことを考えてしまいました」

「ヴァイオラ、あなたの新大陸での経験こそ運命という言葉にふさわしい。それに比べれば、私のその後など取るに足りません。ただ、深い悲しみに耐えるために、生きる力の全てを使うような出来事には確かに遭いました。私はハムレットという名の息子を亡くしました。そのことと、ハムレットという芝居と関係がないと言い張るつもりはありません。また、反乱に巻き込まれ、重い罪を負わされそうになったこともありました。私は無事でしたが、悲劇を間近で、つぶさに見ることもありました」

15 シェイクスピアの回想。息子の死への悲嘆。サウサンプトン伯らの反乱を示唆する劇に関わり、裁判にかけられる。死罪の危険があったが無罪放免となる。一方で入牢するサウサンプトン伯、刑死した人々。

16 玄関が騒がしくなる。男の大声。ヴァイオラはシェイクスピアに別室に行くよう促し、乳母が案内する。

大声の男はウエセックス公の弟エドワード。若い時に放蕩が過ぎて家から勘当されていたが、両親とウエセックス公が亡くなったと知って実家に舞い戻っていた。しかし家督はリチャードに受け継がれる。自らを正統な世継ぎとするよう幾度も王に働きかけたものの、実ることはなかった。

エドワードは、一緒にウエセックス伯の家に来るようリチャードを誘う。命令する口調。しかし、リチャードは、エドワードが居座っている屋敷に戻ることはできないと断る。

「公家にいないのでは、ウエセックス公の爵位を放棄するようなものだ」

「爵位は父より引き継ぎました。屋敷ではなく、我が身に与えられたものです」とリチャード。

「屋敷を留守にし、貴族でもない母親の実家にとどまっているのでは、公爵の体面が台無しだ。王の臣下としての義務にも背く」

「ウエセックス公は、国王陛下よりこの家に滞在するお許しを得ております」とヴァイオラ。

ヴァイオラをにらみつけるエドワード。

「兄上の死を待っていたかのように、別の男に嫁いだ女に口出しの権利はない。かつては芝居書きの男と懇ろになり、イングランドに戻ったかと思ったら、今度はジエイムズ王をかどわかそうとするのか」

リチャードは壁にかかっていた剣を取る。

「母上と国王陛下への侮辱は許しません」

「国王を侮辱してはいけません。お前の母親に遠慮をするつもりはないがな」

リチャードは剣をエドワードに向ける。エドワードも剣柄に手をかける。

ヴァイオラは二人の間に歩み出る。

「リチャード、剣をおさめなさい。私は、このような人の言葉で侮辱されたりはしません」

続いてエドワードの方を向いて。

「エドワード様。どうかお引き取りください。リチャードと闘えば、たとえ勝ったとしても、年端のいかない相手に大人げない、と誹りを受けこそすれ、名誉になることはありません。万一ウエセックス公を殺めれば、あなたは陛下に背く反逆者も同然です」

エドワードは剣から手を離し、ニヤリと笑う。

「本物のウエセックス公であればな。兄の後を継ぐのは、本来なら、この私であったはず。あなたも知っている通り」

エドワードはヴァイオラを射るように見た後、踵を返して立ち去る。

リチャードがゆっくり剣を降ろす。

シェイクスピアが部屋に戻って来る。

リチャードは剣を壁に戻す。

「ミスター・シェイクスピア、今日はお帰りください」

「聞こえていましたが、エドワードに屋敷を乗っ取られたのですか？」

「義父母が亡くなる前に帰ることができず……留守の時間が長過ぎました」

「ヴァイオラ、その長い時間は、いま嵐よりも速く消え去ろうとしています」

ヴァイオラはシェイクスピアの目を見るが、何も言わない。沈黙が続く。

シェイクスピアは黙礼をして立ち去る。

17 同じ夜。シェイクスピアはデ・レセップス家の屋敷に舞い戻る。裏口からバルコニーの前に行く。

「ジュリエット」

呼びかけるが、誰も現れない。シェイクスピアは意を決して、木を登り始める。かつては軽々と登れたの

に難渋する。ようやくバルコニーにたどり着こうとした時、乳母が顔を出す。ずり落ちそうになるシェイクスピア。

「ヴァイオラ様よりお手紙です」

手を伸ばして手紙を受け取るが、バランスを崩して地面にずり落ちる。

「大丈夫ですか？」

シェイクスピアは痛みをこらえて立ち上がる。

18 月明かりの中で手紙を読むシェイクスピア。

「もはやお目にかかることはできません。

取り戻せないほどの時が流れました。

わたしはもう以前のわたしではないのです。

なのに、ウィル、あなたは丸で昔と変わっていないみたい。

ならば、お願いです。

わたしがイングランドにいる間に、新作を見せてください。

このあいだ、あなたの一番新しい作であるテンペストを見ました。

随分作風が変わっていて驚かされました。でも、素晴らしかった。

ところが終演後、観客の幾人かが、あなたはもう新しい芝居を書かないと噂していました。テンペストはシェイクスピアの別れの挨拶なのだ、と。

そんなことはないと私は信じます。

これまでお書きになった大傑作の数々。あなたはその作者なのです。

イングランドに戻って、ハムレットの公演の予定がなかったので、国王陛下にお願いしました。どうしても見たかったのです。陛下は夫の縁戚にあたります。快く、国王一座に命じてくださいました。

わたしがあなたに言った言葉を覚えていますか？

わたしを本当に傷つけるのは、あなたが筆を折ることだ、と。

是非あなたの新作を見たいのです。

そうすれば、あなたにいま一度会えることになります」

19 無人のバルコニーを見上げるシェイクスピア。深いため息をついた後、歩きながら独白。

書かないのではない。書けないのだ。ヴァイオラは自分がどれだけ残酷な頼みをしたのか分かっていない……。

おや、しかし、今日、合作の申し出を受けたばかりだぞ。俺は書けなくとも、フレッチャーにアドバイスをくれてやり、共作者として名を連ねることはできる。

いや、駄目だ。三文喜劇の作者になるくらいなら、何も書かない方がまし。沽券にかかわる……。

20 朝、遅い時間。眠りこけていたシェイクスピアはノックの音で起こされる。

フレッチャーが現れて、改めて合作の申し出をする。ードン・キホーテはとても長く、その中には恋物語や波瀾万丈の捕虜の脱出劇など副筋がいくつもあり、そちらを本筋にして、狂った騎士とデブの従者を混ぜ合わせれば、ドタバタ喜劇にせずすみませう、と。

シェイクスピアは寢床の中で苦い表情だが、黙って聞いている。

「まず適当な筋立てを副筋から選んで上演用の筋立てを作ります。ご存じの通り、トマス・シエルトンなる者のドン・キホーテ英語訳が出版されておりまして、が、内容は私が説明いたしますから、ミスター・シェイクスピアは読んでいただく必要ありません」

「元より、あんな長いものを読んでいられるほど暇ではない」不機嫌そうな声。「合作とって、お前は、俺に何をさせたいのだ？」

「勿論、言葉、言葉、言葉、でございます。私のひねり出す砂粒のような言葉を、ミスター・シェイクスピアの魔法で、輝く黄金、きらめく星座に変えていただけなのです」

シェイクスピアの傍白。言葉、言葉、言葉……それこそ私が失ったものなのだ。

「俺はお前のために言葉を飾って詐欺師になるつもりはない」

「いいえ。国王陛下のために。ドン・キホーテは、王宮での芝居見物を楽しみにしているサボイ公国の外交使節のご所望なのだそうです」

「サボイだろうがサボイだろうが、俺には関係ない。帰れ」

「私は諦めません。使節が来るのは十二月。まだ一月以上あります」
フレッチャーが去って行く足音。考えこむシェイクスピア。

21 翌日午後。グローブ座で支配人と収益の配分について折衝するシェイクスピア。終わって外に出

ると、詩人、劇作家のベン・ジョンソンに出会う。年下なのに、ぞんざいな口調。

「新作の打ち合わせか？」

シェイクスピアは苦い表情になる。

「違った、錢勘定だ。そういえば貴公の新作は、昨日、宮廷で披露したばかりだな。大層な評判だ」

「まったく、その忌々しい滅らさず口に匹敵するほど冴えた本が書ければ、お前さんも人気脚本家に仲間入りできただろうに」

二人は声を出して笑う。

「さつき、フレッチャーに会ったぞ。ポーモントに逃げられて、次の共作者さがしであたふたしている」

「お前さんにも話を持ちかけたのでは？」

「いや。畏れ多くて頼めないらしい」

「お前さんの口の悪さに耐えきれないと思ったんだな」

「貴公に頼んだが、断られたとこぼしていた。合作でも書かないよりましだと俺は思う。貴公の才能を惜しんで言っているのだ」

「フレッチャーがか？」

「フレッチャーも、俺もだ。貴公には残念ながら俺ほどの教養はない。ラテン語は大してできず、ギリシア語はもつとできない。今やフレッチャーほどの人気もない。冬物語やテンペストは大衆には難し過ぎた。しかし、貴公の才能の大きさには、フレッチャーはもちろん、俺ですらわずかに届かない。全盛期においてはということだが」

ジョンソンはシェイクスピアに背を向けて劇場に入っていく。

22 夕暮れ。デ・レセップス家の外にいるシェイクスピア。裏口は封鎖されていた。門に回る。ここも閉ざされている。門衛は、誰であろうと取り次ぎはできないと言う。諦めきれずにウロウロしていると、乳母が出て来る。

「奥様は、リチャード様の大学入学の準備のため、オックスフォードに出かけて留守です」
「いやに警戒嚴重だな」

乳母は表情を曇らせる。

「今朝方も、エドワード様が屋敷にお見えになりました。それで、お二人はオックスフォードに行く予定を早められたのです。エドワード様に留守を気取られないよう、行く先を詮索されないよう、屋敷を閉め切っております」

「難儀なことだ」

23 夜。サウサンプトン伯の書斎。サウサンプトン伯は机の上で猫を撫でている。シェイクスピアが斜め向かいの椅子に腰かけている。シェイクスピアが話しかける。

「昨日はお目にかかれませんでした」

「目立たぬよう、後ろの席でひっそり見ていた」

「見事な上演でした」

「そして、見事な台本。反乱の咎を受けた身では、あの劇を王のおそばで見るとは憚られた。ハムレットは、それほどに生々しい」

「私にとっても同様です」

「かつての恋人の残り香などと戯れにさえざつたら、その張本人が現れたのだからな」

「ヴァイオラが陛下にハムレット上演をお願いしたのだそうです」

「その願いが、ウイールにとってどれほど残酷かも知らずに」

「私はヴァイオラがイギリスに戻っていたことを知りませんでした」

「昨日、訳知りに聞かされたが、彼女は女王の時代にも一度アメリカから帰っているそうだ。ウエセックス公の爵位継承のために」

驚くシェイクスピア。

「それはお前には知らせないき。息子の将来のため、危険を避けたんだろう。お前に会えば、気持ちを抑えられないかもしれない。今より若かったのだから」

「私にはアメリカから一度も帰っていないと言ったのです」

沈黙。

サウサンプトン伯は話題を変えようとする。

「で、私への頼みとはなんだ？」

シエキスピアの表情が暗くなる。

「ウエセックス公のために、助力をお願いしようと思っていました」

「つまりはヴァイオラのため？」

「ヴァイオラは、私にはもう会わないと書いて寄こしました。ならば、向こうから会いたくなるよう仕向けたと思います」

「ウエセックス公のためとなると、評判の悪い放蕩息子、エドワードが公の屋敷に居座っている件だな。

俺は噂しか知らんが。ウエセックス公が屋敷に戻れないのか？」

「いいえ。エドワードは、ウエセックス公に屋敷に戻るよう脅しています。公は拒否しています」

「ふむ、それは賢明だ。相手の懐に入るのは危険すぎる」

「ウエセックス公はいい青年です。演劇好きで、シエキスピアを尊敬しています」

「見込みのある男だ」

「救ってあげられませんか？ ヴァイオラのためでもあり、私のためでもあり……」

考える表情のサウサンプトン伯。

「難しい。他家の争いに口を挟むことになる。おまけに、聞いた限りでは、エドワードの言い分にも一分の理がありそうだ。そもそも私は差し出がましいことのできない立場。エドワードが国法や、国王の臣下としての範を破れば別だが。怪しいというだけで手出しはできない」

「何事か起こってからは悔いが残ります」

「考えておこう。が、約束はできない」

「承知しました」

24 シェイクスピアは立ち上がり、机に歩み寄る。猫を撫でようとする、猫はシェイクスピアの手を逃れて机から飛び降りる。シェイクスピアの視線は、猫が乗っていた書物に引き寄せられる。

「これ、ドン・キホーテの英訳ですね？」

「アイルランド人のトマス・シエルトンなる者が訳した本だ」

「このような滑稽本を自らお求めになったのですか？」

「いや、読むように勧められた。馬鹿馬鹿しきの極みだが、読めば気分が晴れる。憂鬱症の治療になるからと主治医が言うんだ」

「読まれましたか？」

「いや。何しろこの分量だ……読みたいのか？」

「いいえ。ドタバタ喜劇は好みではありません。実は、フレッチャーは国王陛下からドン・キホーテを題材にした新作のご用命を受けたのです。そして、私に合作を申し込んで来ました」

「ポーモントの代わりか。引き受けたのか？」

「いいえ」

「だろいな」

「ただ、ヴァイオラから、イングラントにいる間に新作をみせてほしいと……よしんば新作が書けたとしても、上演は間に合いません。合作なら何とかかなりですが、ドン・キホーテはどうにも」

「ならば、読んでみるさ。心底気に入らないなら、諦めもつく。持っていくがいい。私は後にしよう。憂鬱

症は長い付き合いで愛着がある。そう無下な扱いはできない」

シェイクスピアは分厚い本に視線を向ける。猫が戻って来て再び乗ろうとする。男の手が本を取り上げる。猫が不満気に鳴く。

25 シェイクスピアの居室。蝋燭の光で英訳を読むシェイクスピア（音読）。最初は集中できない様子

だったが、次第に小説の内容に吸い寄せられ、声に熱がこもる。……

光が不意に明るくなって驚くシェイクスピア。蝋燭が溶けて消えそうになっている。シェイクスピアはすっかりドン・キホーテに夢中だ。慌てて新しい蝋燭に火を移す。

「何という物語だ」シェイクスピアの独り言。「下らないドタバタ喜劇だと抜かしたやつは誰だ。スペインにこんな書き手がいたのか。サーバンテーズ？ チェルバンテス？ 覚えておくとしよう」

26 夜明け。シェイクスピアは読み続けている。熱心な祈禱者のように。独り言。

「こいつは何を読んで、こんなものを書いたんだ。騎士道物語を読みすぎたのは作者だろう。そして、カルデニオ！ まるで復讐の場から逃げ去っていくあの王子じゃないか。ハムレット！ ハムレット！ ああ、俺は今更ハムレットの亡霊に取り憑かれた。みながハムレットを持ち出して、俺を狂わせようとする」

シェイクスピアは窓の外を見やる。

「カルデニオ、お前はなぜ、裏切って恋人ルシンダを奪った友人に復讐しないのだ？ なぜ、ルシンダと裏切り者との結婚式を止めない？ なぜ、結婚式の場から黙って逃げ出し、山に引きこもって狂人になる？ でたらめじゃないか。だが、俺は知っている。こうでなくてはならないのだ。人生と世界の暗い真実に遭遇したこのある者だけが、このように書ける。並の作家は思いつきもしない。サーバンテーズ、俺

はお前がどうやってこんなものを書いたのか知っているぞ。ハムレットを見たのだろうか？ 盗んだのだ。俺がスペインのローペ・デ・ベীগから拝借したように。もし、そうでないなら、サーバンティーズ、お前は俺と同じほどの才能の持ち主ということになる」

シェイクスピアは一人微笑む。

「もしハムレットを見て書いたのだとしても、そこに気づいたことは褒めてやろう。しかし、ハムレットなしで自ら書いたのなら……大した奴がスペインにもいたと認めるしかない。だが、サーバンティーズ、残念だったな。カルデニオは不徹底だ。ハムレットにはとても敵わない。やはりあの王子は特別だ。サーバンティーズの物語は別の筋道に飛び込んでしまった。それはそれで面白いが。その証拠に、俺は読むのをやめることができない」

読書を再開するシェイクスピア。

27 昼。机に突っ伏しているシェイクスピア。荒々しくドアを叩く音で顔を上げる。ドアが破られる。

エドワードが従者を連れて入って来る。

「シェイクスピア、この盗人。お前は生きている兄ウエセックス公を愚弄しただけではすまず、亡くなった後にまで虚仮にした。デ・レセップス家でヴァイオラと会ったな」

首をかしげるシェイクスピア。

「とぼけるつもりか」

「ドアを破って飛び込んで来るような無礼な人とは話しません」

剣を抜くエドワード。

「ヴァイオラと息子がどこに行ったか知っているはずだ。言え」

再びシェイクスピアは肩をすくめる。

エドワードはシェイクスピアに剣先を向ける。避けるシェイクスピア。エドワードは二の太刀を出そうとする。身構えるシェイクスピア。しかし、エドワードは剣先を下げる。

「今日はこちらまでで勘弁してやる。が、俺は兄のように礼儀正しいお坊ちゃんではないぞ。甘くみるな」
「兄上様も、さほど礼儀正しくありませんでしたが――」

シェイクスピアの言葉が終わらない内に、剣先が眼前に迫る。

「愚弄の言葉の対価は命だ。舞台の役者と違って、現実では生き返ることはないぞ」

エドワードが剣を収め部屋を出る。シェイクスピアはため息をつく。読書を再開する。

28 午後。オックスフォード大学で学生たちの芝居を見るリチャード。その後、浮かない顔で町を歩く。

屋敷に入る。ヴァイオラとの会話。

「芝居といっても、大学ではラテン語でやるんだ。わけがわからない」

「大学で学べば、ラテン語は今より理解できるようになります」

「そういう問題じゃないんだ。ロンドンで本物の役者の芝居を見た後では、こちらのはでくの坊の人形芝居。難しい言葉で誤魔化しているだけ」

「大学は芝居ではなく学問をするための場所でしょ」

「大学でも芝居はできると言ったのは母上です」

困り顔のヴァイオラ。

29 夜。読み続けるシェイクスピア。笑う。蝋燭の光で目がぎらついて見える。

30 朝。ドン・キホーテを読み終える。その後、サウサンプトン伯の使いから手紙を受け取る。

「やはり介入は困難だ。ただ、ウエセックス公をかくまうくらいはできる。時間を稼いで、エドワードが失策を犯すのを待とう。やつは馬鹿をしでかす男だ。承知なら、ウエセックス公に正体を隠して本宅に来るように伝えてくれ。妻には話をしてある。子供たちには内緒だ」

31 デ・レセップス家に急ぐシェイクスピア。乳母を呼び出し、伝言をして自筆の手紙を渡す。

32 シェイクスピアは劇場に走り、フレッツチャーに会う。

「ドン・キホーテを引き受けることにした」

フレッツチャーは満面の笑み。

「どの副筋にするかも決めた」

「と言いますと？」

「ドン・キホーテを読んだんだ」

「それはまことに結構でございます」

「主人公はカルデニオだ」

「え？ カルデニオですか？ シエラ・モレナの山中で暴れる狂人のカルデニオ？」

戸惑うフレッツチャー。

「そう、その男だ」

「カルデニオは主人公に向かないように思います。裏切り者と戦わない情けない奴で、人柄は良いけれ

ど、男としての魅力に欠けます。彼が最も目立つのは、狂って無関係の人間に暴力をふるう場面なのですから」

「カルデニオを魅力のある主人公に仕立てるのだ。裏切りと恋物語の組み合わせで面白いストーリーになる。最後は二組のカップルの結婚式。観客は大喜びだ」

「ドン・キホーテの中には、捕虜と、キリスト教に憧れるオスマン美女の話や、牧童に身をやつして恋人を追いかける貴族の少年など、劇にふさわしい題材が他にもあります」

「ならば合作の話はなかったことに」

息を呑むフレッチャー。

やがて、うなだれるようにうなづく。

「早速、始めよう。メモを」

あわててペンと紙の用意をするフレッチャー。シェイクスピアが語り始める。

3 3 シェイクスピアの語りから、劇のリハーサル風景に変わる。シェイクスピアがストーリーを紡ぎ、フレッチャーが台詞を書く。ただしカルデニオの独白はシェイクスピアが担当。劇団員たちが演じ、シェイクスピアが修正する。主導権はシェイクスピアにあるが、フレッチャーや劇団員の意見も聞く。

1 ドン・キホーテとサンチョ・パンサが登場する。ドン・キホーテが物語の大枠を語る。サンチョがそれに茶々を入れる。二人が退場して次の場に。

2 地方貴族の屋敷。美少女シンダの実家。幼なじみのカルデニオは貴族の跡取り息子、親の認める許嫁。カルデニオは駿馬の買い付けに行くとルシンダに告げる。先日君も会ったドン・フェルナンドから

紹介があつたのだ、と。カルデニオの父親も乗り気。ドン・フェルナンドは高位の貴族の次男坊。ルシндаは結婚が遅れそうだと不安を口にする。心配はいらない、首尾良く進めば時間はかからないとカルデニオ。二人は退場。

3 豪農の家。娘の美女ヴィオランテの寝室。ドン・フェルナンドは寝台のヴィオランテを横目に服装を整え、出て行くとする。次はいつ会える？ とヴィオランテ。もう会うことはない、さようなら、とドン・フェルナンド。出て行く。結婚の約束をしたから許したのに……。絶望するヴィオランテ。

4 ルシндаの実家。ドン・フェルナンドが現れ、ルシндаの父親にルシндаとの結婚を申し込む。父親は承諾する。ルシндаが呼ばれる。近々の内にドン・フェルナンドとの結婚式を行う、と父親が告げる。自室に駆けこむルシнда。

5 自室でカルデニオあての手紙を書くルシнда。窓から、旅の男に金と共に手紙を託す。男は事情を聞くと同情し、大急ぎでカルデニオに届けると約束する。

3 4 サウサンプトン伯の本宅にウエセックス公がいる。アメリカから来たヘンリーの遠い親戚トマス・ケントとの触れ込み。ヘンリーの子供たちの好奇のまなざし。ようやく一人になったと思ったら、長姉のマーガレットが戻って来る。

「わたしは、あなたが本当は誰か知っている。ウエセックス公でしょ？」

「何を言ってるんだ？ ぼくはトマス・ケント」

鼻で笑うマーガレット。

「あなたを見たのよ。宮廷でハムレットが上演された日。わたしもお父様と見てた」
驚くりチャード。

「でも、うぬぼれないですよ。あなたがハンサムだから覚えていたなんて話じゃないから。終演後、あなたがレイディー・ヴァイオラと一緒にいたので察したの。レイディー・ヴァイオラは、わたしの憧れだから」
「憧れ？」

「そうよ。あなたのお母様はロミオとジュリエットの初演でジュリエット役を演じたんでしょ？ 女性なのに、主役の一人として舞台上立った。それもミスター・シェイクスピアの作品。こんなすごいことはない」
「母が芝居に……冗談だろ？」

「レイディー・ヴァイオラがお母様だと認めたわね」
しまったという顔のりチャード。

「ミスター・シェイクスピアの親友であるお父様に聞いたんだから間違いない。あなた本当に知らないの？」
りチャードが首を左右にする。

「母上は確かに芝居が好きだ。ミスター・シェイクスピアの作品を特に好んでいる。わたしの前で役を演じてくれたこともある。しかし、女性が舞台上に立つのを禁じる国法を破って芝居に出るような、そんな悪事を働く方ではない」

「悪事？ 女が舞台上に立って何が悪いの？ わたしも、レイディー・ヴァイオラみたいに主役を演じたい」
あきれれるりチャード。顔を近寄せるマーガレット。

「わたし、ずっと芝居の稽古をしてるの。あなた、ミスター・シェイクスピアにわたしを売り込んで」
どぎまぎするりチャード。

笑いながら去って行くマーガレット。
「頼んだわよ」

35 稽古場。シェイクスピアはいないものの、稽古は進められる。

6 王宮。ドン・フェルナンドの実家。馬の買い付けについて、ドン・フェルナンドの兄ローデリックと話を
するカルデニオ。兄は穏やかで気品のあるカルデニオに好感を抱き、わがままな弟の友人でいてくれるこ
とに感謝する。そこに、ルシンダからカルデニオあての手紙が届く。驚くカルデニオ。詳しい事情が不明
なので、ローデリックには理由を言わないまま、暇を請う。

7 ルシンダの実家。カルデニオは窓辺に寄り添うルシンダを発見。花嫁衣装。式が始まろうとしてい
る。ルシンダは、ドン・フェルナンドと結婚するくらいなら懐剣で死ぬつもりだ、とカルデニオに告げる。屋
内から女性が来て、ルシンダを連れ去る。

8 式場となる部屋のタペストリーの裏に隠れるカルデニオ。式が始まり、ルシンダの父親は娘をドン・フ
エルナンドの花嫁として差し出そうとする。

タペストリーの裏からカルデニオが飛び出し、ドン・フェルナンドに剣で打ちかかる。応戦するドン・フェ
ルナンド。ドン・フェルナンドに加勢する従者たち。気絶するルシンダ。

36 「なにをやってるんだ」シェイクスピアの怒声でリハーサルは中断する。

「誰が勝手に話を変えた？」

カルデニオ役が一步前に入る。舞台袖からフレッチャーも登場。

「みなで相談をしまして」とフレッチャー。「もちろん、この後でカルデニオは嘆きの独白をしつつ山にこも

りますので、大筋は変わりません」

「この場から黙って去るような男は男じゃない。主役にふさわしくない」と主役。

「気絶していたルシнда役も上半身を起こして加わる。」

「女の身としても、ここで戦ってくれない男はごめんです」

「違う。カルデニオはそんな単純な役柄ではないんだ」とシェイクスピア。「ルシндаは家のため、結婚の誓いをする。後で死ぬつもりで。友人の裏切りに傷ついていたカルデニオは彼女の言葉を聞き、さらに深い絶望へと突き落とされる。その底知れない絶望が、カルデニオから行動という選択肢を奪うのだ。何もしないのではなく、できない。その後には、自分自身への絶望というさらなる悲惨が待ち受けている。しかし、それはその場ではわからないんだ」

役者たちはシェイクスピアの言葉を理解しない。シェイクスピアは稽古を続けさせようとする。

「元の台本でやり直す。カルデニオとルシндаが再会する場面から」

「なかなか動き出さない役者たち。苛立つシェイクスピア。」

「俺が書いた通りにできないなら、この台本は引き上げる」

「とんでもない」とフレッチャー。「今更別の話にはできません。さあ、みな始めて」

「澁々動き出す役者たち。主役の二人は丸でやる気がない。」

「リハーサルが終了。シェイクスピアは楽屋にいるフレッチャーを呼び出す。」

「主役は交代だ。ルシндаも、もっといい役者が見つければ変える。オーディションの準備をしてくれ」

「そのつもりでおりました」とフレッチャー。「今し方、主役の男から役を降りると通告されました。こんな

芝居に出て、自らの価値を落としたくない、と。身の程知らずなことを申しまして」

「それは好都合だ」とシェイクスピア。苦い表情。

37 午後。サウサンプトン伯の屋敷の庭。マーガレットは、風に舞って飛び込んで来たピラを見て喜色満面。リチャードの部屋の前へ。窓辺のリチャードにピラを見せる。

「国王一座がオーディションをするのよ」ピラを見せる。

「募集。シェイクスピア／フレッチャーの新作『カルデニオの物語』の主演。ハムレットのような悩める貴公子。併せて女役も募集」

「それに参加するの？」

「当然よ。合作だけど、ミスター・シェイクスピアの久しぶりの新作なんだから。このチャンスは逃せない」

「それじゃあ、頑張ってる」

「リハーサルをするから手伝って」

二人は庭でハムレットのいくつかの場面を演じる。マーガレットはハムレットになったり、オフィーリアになったりし、リチャードはそれに合わせる。

「あなた、結構やるじゃない？ オーディション当日は一緒に来て」とマーガレット。

「無理だよ。家から出ては駄目だと君の母上に命令されてる」

「見つからなければいいでしょ？ 変装すれば平気。会場のローズ座は危ない町にあるのよ。怪しい人がいっぱい。そんな場所にわたし一人で行けると思う？」

「だけど……」

「男性用の衣装を乳母に用意してもらおう。彼女も芝居好きで、何度か一緒に行ってる。あなたの変装用の服も、彼女に頼むことにする」

38 オーディション当日。シェイクスピアが、ローズ座でフレッチャーや支配人のヘーンズローと打ち合わせ

をしている。そこにヴァイオラの乳母が焦燥の表情で現れる。エドワードが手下を連れて来た。ウエセツクス公を出せと言い、断ると屋敷の門を突破し、屋敷中を捜し始めた、と。シェイクスピアは舞台用の剣を取り、刃どめを外して走り出す。

「オーディションは俺が戻ってからだ。役者たちは待たせておけ」

39 サウサンプトン伯の屋敷。乳母から届けられた変装用の衣装が女性用だったので、リチャードは着るのを嫌がる。結局マーガレットに説得されるが、出発の時間が遅くなる。マーガレットは、オーディションに遅れたらリチャードがミスター・シェイクスピアにかけあうのよ、と軽い調子で言う。

40 デ・レセップス家の屋敷。シェイクスピアは屋敷に入って、エドワードを探す。ヴァイオラを確保していた男を打ち倒して、ヴァイオラを解放する。

「エドワードは？」

「二階に。でも、相手は大勢です」

シェイクスピアは階段を駆け上がる。エドワードを見つけ、剣を打ち合う。優勢になるが、手下に邪魔されて逆転。シェイクスピアは廊下の隅に追い詰められる。エドワードの切っ先が迫った時、廊下にもものすごい音が響く。

「エドワード、狼藉が過ぎるぞ」

黒装束、黒マスクで顔を隠した騎士が威厳のある声を発する。同じく黒装束の従者たち多数。槍を持っている。

「誰だ？」

「知らぬ方が身のためだ。知れば後悔する。その時に頭が胴体とつながっていければの話だが」
エドワードはしばらく黒騎士をにらみつけていたが、剣を下げる。

「去れ」

立ち去るエドワードたち。

頭を下げるシェイクスピア。ヴァイオラが現れ、同様に頭を下げる。

「王の命により、エドワードの動静を探っていた。しかし、このことは内密にしておけ。一族郎党の争いは、たえ国王ご本人でも滅多に容喙できぬ習い。本日の沙汰は、国王一座の作者を守るためと心得よ」
シェイクスピアはさらに深く頭を下げる。

「座付き作者は剣ではなくペンを取れ。劇場に戻るがいい」

シェイクスピアは立ち去る。ヴァイオラと一瞬目を合わせる。

黒騎士と従者たちも去る。黒騎士がヴァイオラの方を向き、少しだけマスクを下げて微笑む。ヴァイオラは喫驚し、前よりも深く頭を下げる。ジェイムズ王その人だったのだ。

41 ローズ座。シェイクスピアが戻る。

「応募者、少ないな」

「だいぶ帰りました」とフレッチャー。

「待ちくたびれて」と支配人ヘーンズロー。

そこに男装のマーガレットと女装のリチャードが駆け込んで来る。

「もう締め切った」係の者が二人を帰そうとする。「それに女は駄目だ……お前は男か」係の者が笑う。
うなだれるリチャード。

「どうせ、遅れてる。入れてやれ」

シェイクスピアが申し渡し、他の二人も反対しない。
オーディションが始まる。シェイクスピアは苛立って来る。

「上手い下手より前に、どいつもこいつも品がない。カルデニオとルシンダは清純さを持った若い貴族なんだ。この連中は召使いか売春婦にしか見えない」

「品のある役でしたら、国王一座の役者にふさわしい者がいるのでは？」とヘーンズロー。
フレッチャーが笑いそうになる。にらむシェイクスピア。

マーガレットの番になる。リチャードと舞台に登場。

「一人ずつだ」とフレッチャー。

「一人でも大丈夫ですが、二人でやる方がもっとうまくできます」とマーガレット。

「二人いっぺんなら、早くすむ」シェイクスピアは投げやりな様子。舞台を見ずに言う。

「じゃあ、やっていい」とフレッチャー。

「私は応募者ではないんですが」と小声でリチャード。誰にも聞こえない。

ハムレットの一場面をマーガレットが王子になって演じる。シェイクスピアは少し関心を持つ。リチャードがオフィーリアの台詞を口にするると止められる。声変わりした男は若い女の役はできない、と。

「私はオフィーリアもできます」とマーガレット。「トマス、ハムレットをやって」

リチャードが台詞を言う、と、シェイクスピアが身を乗り出す。二人の演技。

「この男は、いいぞ。声や仕草に気品がある。外見も悪くなさそうだ。女装はひどいが」

「台詞回しは感心しません」とフレッチャー。

「それは稽古で何とかなる。気品は演技では出せない。演技でそれができるのは、よほどの名優だ」

「そんな俳優は引く手あまたで、オーディションには参りません」とヘーンズロー。

演技を終え、緊張の面持ちでシェイクスピアを見やるマーガレット。

「男はカルデニオ役で合格」

驚くりチャード。

「喜べ、主役だぞ」

「私は？」とマーガレット。

「この子の外見は捨てがたいが」シェイクスピアがつぶやく。「勝ち気なのが表に出すぎて、淑やかなルシムダには向かない」

「ヴィオランテはどうでしょう？」とフレッチャー。「今の役者は演技はまあまあですが、絶世の美女に見えないのが難点で」

「そうしよう」とシェイクスピア。

「君はヴィオランテ役で合格」とフレッチャー。

「それは主役ですか？」とマーガレット。

「主役と同じくらい重要だ」とシェイクスピア。

不満そうなマーガレット。

「いやなら、やめだ」とシェイクスピア。

「とんでもない。勿論やりませう。ミスター・シェイクスピア」

マーガレットはリチャードの足を踏む。

「悔しい。なんで、あなたが主役？」

「逃げ出したい」とリチャード。

「なに言ってるの？ シェイクスピアの舞台に出られるのに」

「それは出たいけど……付き添いのつもりだったから、覚悟がないんだ」
シェイクスピアは後を任せて、劇場の外へと走り出す。

4 2 午後遅く。サウサンプトン伯の居室。

シェイクスピアはデ・レセップス家で何が起こったかを話そうとする。しかし、伯は知っていた。

「黒い騎士は、誰だったんですか？」シェイクスピアがたずねる。「伯ご自身ではありませんね？」

「驚くなかれ、ジェイムズ王その人だ」

言葉を失うシェイクスピア。

「伯が働きかけてくださったおかげで？」

「働きかけはした。しかし、私にそこまで影響力はない。ヴァイオラの方からも何かあったのだろう」

「彼女の再婚相手が王の縁戚とは聞きましたが、それほど力が？」

「王はヴァイオラをだいぶ気に入っている様子だ」

ハムレット公演後の様子を思い出すシェイクスピア。

「国王陛下の関心の的は男性と承知していました」

「そうなのだが、そうでない時もある。それは不思議なことではない。お前も知っている通り」

心配顔になるシェイクスピア。

4 3 夕暮れ。デ・レセップス家。シェイクスピアが行くと乳母が出迎える。奥様はさっきまで伏せていま

した、と告げる。ヴァイオラは椅子に深く腰かけている。

「失礼をお許しください」とヴァイオラ。「わたしがお礼にうかがうべきでした」

「お加減は？」

「疲れただけです」

シェイクスピアが小声で。

「黒い騎士の正体を聞きました」

うなづくヴァイオラ。しかし、それ以上は何も言おうとしない。

「ご子息は無事なのです」

「ええ。ありがとうございます。感謝しかありません」

「どんな様子で？」

「よくしてもらっています。お子様たちとも仲良くなれたとか」

「それは素晴らしい」

シエイクスピアはヴァイオラを見つめ、ヴァイオラもそれに応じる。

シエイクスピアはもの言いたげな表情。しばらく見詰め合う。

「ヴァイオラ、あなたは私に小さな傷をつけました。嘘を……」

ヴァイオラは驚いた表情。

「聞いたのですね……以前イングランドに帰ったこと」

うなづくシエイクスピア。

「ごめんなさい。でも、リチャードを守らねばなりませんでした。わたしの再婚で不利益を被ることがないよう。そのため、自らの思いを封印しました」

「嘘を言う必要はなかった」

「実はアメリカに戻る船が、十二夜のように難破しました。奇跡的に助かったことと、以来船に乗るのが恐くなったことは、本当の経験なのです」

「生きて会えて良かった」

見詰め合う。

「あなたに会えない代わりに、シエイクスピア作の劇をできる限り見ました。オセロー、マクベス、リア王、喜劇もたくさん。あなたのとんでもない才能に震えました。不明を恥じます。これほどとまでは思ってい

ませんでした。前にもお話ししたように、ロミオとジュリエット以前ですら素晴らしかったのですから。けれどその時、巡り合わせでハムレットを見ることが叶いませんでした。見たいばかりに恐れを克服し、リチャードと船に乗ったのです」

「エリザベス女王の仰ったとおり、芝居小屋でなら、あなたを見つけれられたわけだ」

「ウイル、わたしはあなたが俳優として出演している舞台も見ました」

「なんてことだ。客席にいたのですか」

「涙で舞台が見えなくなりそうでした」

シエイクスピアがヴァイオラに顔を近づける。唇が触れたところで、ヴァイオラはシエイクスピアを押しとどめる。

「新作が見られると聞きました。必ず行きます」

「合作ですけれど」

「筆を折ったと聞くより、ずっといい。船に乗った甲斐があったというものです。それでは、宮廷で」

「これから何度でも会いたい」とシエイクスピア。

ヴァイオラの表情から笑みが消える。

シエイクスピアはうつむき、礼をして立ち去る。

4 4 午前。サウサンプトン伯の居室。

「急に呼び出してすまない」と伯。

うなづくシエイクスピア。

「昨日、娘のマーガレットが来た。ミスター・シエイクスピアの新作のオーディションに合格したと大喜びだった」

驚愕するシェイクスピア。

「主役じゃないけど、主役と同じくらい大事な役だそうだ」

「私は昨日、確かにそんなことを言いました」

「おまけに、悔しいことに、主役選ばれたのはトマス・ケントだったと」

「そんな……ウエセックス公が女装してローズ座に来たことになります」

サウサンプトン伯は笑う。

「オーデションをやり直します。二人にはサウサンプトン伯から——」

「そんなことをしたら、娘に恨まれる」

「危険です」

「私は見てみたいんだ。ロミオとジュリエットの初演の大騒ぎを見逃して残念だった。危険など恐れはない」

「しかし……」

「誰もウエセックス公とサウサンプトン伯の娘が舞台に立つとは思えない。娘の初舞台が楽しみだ」

困り顔のシェイクスピア。

45 劇場。リハーサル。

9 山奥。リチャード演じるカルデニオが叫びながら舞台を飛び回る。

「いいぞ、もっと暴れろ」やけくそ気味のシェイクスピア。

羊飼いの男二人に暴力をふるうカルデニオ。通りかかったドン・キホーテ主従がそれを止めようとするが、カルデニオに逆襲される。地面に倒された四人を尻目に飛び離れていくカルデニオ。場面転換で中断。

シェイクスピアの方を見るリチャード。目が合っても、シェイクスピアは素知らぬふり。

46 リハーサルの続き。

10 羊飼いかから話を聞くドン・キホーテ主従。いつも暴れ狂っているわけではない。正気になると礼儀正しい青年だ、と。そこにカルデニオが現れる。身構える主従。しかし、さっきの狼藉は忘れている様子。羊飼いかから食料を与えられる。

カルデニオの独白。今はこんな浅ましいなりだが元は貴族の出、友人と婚約者に裏切られ、絶望してここにいる、と。

話が一段落する頃、女性の悲しげな歌声が聞こえて来る。みな耳を澄まし、立ち上がって声のする方へ歩き出す。

11 川辺。マーガレット演じるヴィオランテが、羊飼いの恰好で歌っている。主従、カルデニオ、羊飼いが、遠くから様子をうかがう。

ヴィオランテが歌うのをやめ、かぶりものを外す。豊かな金髪が流れ落ちる。見ていた全員が美しさに息を呑む。

ヴィオランテは髪を洗いながら、嘆きの言葉をもらす。貴人との結婚の約束を信じて操を失い、もう家に戻れない。こうして山奥で寂しく一生を終えるのだ、と。

ドン・キホーテがカルデニオに話しかける。

「あの女性は、そなたと同じような苦しみを背負っているようだ」

「ふられた者どうし、仲良くしちやどうですか？ 美男美女でお似合いだ」とサンチョ・パンサ。

「ばかもの」とドン・キホーテ。

「私はルシンダ以外の女性と添うことはない」ごく真面目に答えるカルデニオ。「しかし、あの不幸な女性を放っておくこともできない。助けに行きましょう」

一行はカルデニオを先頭に川に向かう。ヴィオランテが気づいて逃げ出す。

「待って。私たちはあなたの味方です」

全員、舞台から走り去る。

47 リハーサル後。リチャードとマーガレットの劇場行きが家族にばれそうになる。何とか誤魔化す。二人は目配せして微笑む。

シイクスピアはデ・レセップス家へ。中に入れてもらえない。お見舞いを言いたいと伝えると、もう大丈夫だとの返事。裏口も閉ざされている。立ち去る。

48 リハーサルの続き。

12 王宮。ドン・フェルナンドの兄ローデリックと父王が話をしている。ドン・フェルナンドの連れてきた花嫁は伏せったまま。声を聞いたことすらない。二人の結婚はどうにも怪しい。ルシンダの父母が来たら、問いただしてみよう。

ドン・フェルナンドが現れる。しばらく狩りに出る、と。新妻が病気なのに、そんなことをしている場合か、とローデリック。ドン・フェルナンドは無視して立ち去る。入れ替わりに家僕が、遍歴の騎士と称する方がみえております。ご子息の結婚のお祝いを申し上げたい、とか。

遍歴の騎士？ いぶかる国王。騎士道物語で読んだことならあるが……。弟の結婚について何か知っているかもしれません、とローデリック。話を聞いてみましょう。父王は去る。

13 ドン・キホーテとサンチョ・パンサが現れる。騎士の作法が場違いで、面食らうローデリック。

シエキクスピアがドン・キホーテ役の役者に注文をつける。

「ドタバタをやっているんじゃない。ドン・キホーテは滑稽な一方で気品が漂う。狂っていても知性はある。そういう人物だ」

お手上げという顔のドン・キホーテ役。

「並の役者には難しすぎます」とフレッチャー。

「狂っていても理性があるとなると、シエキクスピアだな」とヘーンズロー。

シエキクスピアに交替することになる。

ドン・キホーテは、ドン・フェルナンドがヴィオランテと結婚した前提で祝詞を述べる。ローデリックと話が噛み合わない。ローデリックがルシндаの名前を出すと、そちらはカルデニオという貴族の婚約者のはずとドン・キホーテ。驚くローデリック。ドン・キホーテはローデリックの許しを得て、変装したカルデニオと男装したヴィオランテを招き入れる。

49 リハーサル後。仲良く家路につくりチャードとマーガレット。

その様子を見ているヴィオランテ役を降ろされた役者。ドン・キホーテ役を降ろされた役者が近づいて来る。二人は劇場そばの食堂で話をする。ヴィオランテ役の役者は女だ、俺の女の勘は間違いないと元ヴィオランテ役。そう言われると、そんな気がする、と元ドン・キホーテ役。そばにエドワードの従者がいて聞きつける。従者は二人の食事代を払ってウエセックス公の屋敷に連れて行き、エドワードに話を

させる。

50 シェイクスピアは役者までこなして疲れている。デ・レセップス家へ行く。裏口が開いている。声をかけるが、バルコニーから人は出て来ない。木を登ろうとするも失敗。肩を落とすシェイクスピア。

51 リハーサル。

14 王宮。ドン・キホーテ主従のいる広間にルシンダの父親が現れる。ドン・キホーテが仮装をしていると思っただ父親との騎士道をめぐる頓珍漢なやりとり。変装したカルデニオと男装のヴィオランテもいる。

ローデリックと父王が現れ、両家の挨拶。続いてドン・フェルナンドと、侍女に腕を取られたルシンダが入場。

「息子よ」とドン・フェルナンドに話しかける父王。「つい先ほど、お前が大層親しくしていた友人カルデニオの父君から手紙が来た。カルデニオが行方不明だそうだ。心当たりはないか」
「ございません」とドン・フェルナンド。

カルデニオという名前に動揺するルシンダと父親。ルシンダは椅子を与えられる。
「捜そうとはしなかったのか？」

「行方不明であると知りませんでした」

「自らの結婚について友人に知らせなかったのか？」

「残念ながら。時間が過ぎいませんでした」

「狩りに行く暇はあるのにね」とサンチョ・パンサ。ドン・フェルナンドがにらむ。

ローデリックが質問する。

「もう一人、ヴィオランテという女性の父親からも手紙が届いた。その娘もやはり失踪したそうだが。お前が行方を知っているのではないかと尋ねて来た」

「その名前の女性を知りません」やや動揺するドン・フェルナンド。

「そうか。この少年は、お前とヴィオランテの仲が良かったのを知っているそうだが」
前に出るヴィオランテ。

「存じません」

「本当に、そうか？ よく見てみよ」

顔を上げてヴィオランテを見、驚愕する。

ヴィオランテはかぶりものを取る。

「私たちは結婚を誓いました」

言葉を失うドン・フェルナンド。

驚くルシンダの父親。

ローデリックが再び質す。

「カルデニオの父君によれば、カルデニオは、ここにいるルシンダの婚約者だったそうだが」
ドン・フェルナンドは返事をしない。

「そうだね？」ローデリックはルシンダを見る。

うなづくルシンダ。

「そうでしたね？」ローデリックはルシンダの父親を見る。

深く頭を下げるルシンダの父親。

「弟よ。お前は行方不明のカルデニオを捜そうとは思わないのか？」

「可能なら、そういたします」消え入りそうな声。

「捜し出したら、どうする？」

「謝罪いたします。心から」

「ヴィオランテとは？」

答えを躊躇するドン・フェルナンド。

「どうなんだ？」ローデリックがたたみかける。

「もしお許しがあるなら、結婚の約束を果たします」とドン・フェルナンド。震える声。

「二つの望みを叶えてやろう」と父王。

ヴィオランテは深く頭を下げる。

カルデニオが変装を取る。

ドン・フェルナンドはそれを見て床にくずれ落ちる。

52 リハーサル後。

マーガレットがドン・フェルナンド役の男と話をしている。横目で見るリチャード。

「最後の場、カルデニオとルシンダ、ドン・フェルナンドとヴィオランテ、二組の男女が結婚式をあげるでしょ」

「そう。見事なハッピーエンド」

「見事？ そうかなあ。ヴィオランテからすると、あんなドン・フェルナンドと結婚しても嬉しくない」

「でも、玉の輿だよ。不満なら、ミスター・シェイクスピアに言ってみればいい。君、気に入られてるみたいじゃないか」

「いや、もう言った。そしたら、これはドン・キホーテの筋書きに沿った終わり方だし、観客はみなこれで喜ぶんだって」

「じゃあ、仕方ない」

「そうかなあ」

リチャードが二人に近づく。

「僕はそろそろ帰る」

マーガレットはドン・フェルナンド役の男に別れの挨拶。

「じゃあ、また明日」

「さよなら」

帰路につくりチャードとマーガレット。リチャードは不機嫌。

「ずいぶん仲良く話をするんだね」とリチャード。

「ええ。彼はいい役者よ……もしかして嫉妬してる？」

「まさか」

「男同士で演劇論をしていただけだから」笑うマーガレット。

53 王宮。『カルデニオの物語』本番の日。華やかな花火。観客席にはヴァイオラ、サウサンプトン伯などが揃う。

楽屋裏で緊張の面持ちのリチャードとマーガレット。ドン・キホーテの恰好をしたシェイクスピアが励ます。

メインゲストであるサヴォイの外交使節一行が、ジェイムズ国王夫妻に案内されて登場。観客全員が立ち上がる。

全員が着席して劇が始まる。

間もなく、ヴァイオラはリチャードが出演していることに気づく。驚くが、平静を保つ。

——本番の舞台はダイジェストで。中で、カルデニオの悲痛な独白は強調されるが、映像のみで台詞

(声)は聞こえない。

54 最終幕。王宮の広間で結婚式の用意が整っている。全員参列。この時、シェイクスピアは、エドワードが観客席の後ろに現れたことに気づく。

司祭が、ドン・フェルナンドとルシンダの結婚は無効だったと宣言する。

カルデニオとルシンダが進み出る。二人は、司祭に従って結婚の誓いをする。カルデニオとルシンダは腕を組んで下がる。

次にドン・フェルナンドが進み出る。

父王が次男に尋ねる。

「そなたとルシンダとの結婚はないこととなった。それでは改めてたずねよう。そなたが結婚をする相手は誰なのか」

ドン・フェルナンドはヴィオランテの方に向かって、恭しく腰を折る。

「ヴィオランテ。私は間違っていた。今度は心から結婚の申し込みをする」

「ヴィオランテ」父王が名前を呼ぶ。

ヴィオランテが進み出る。

「そなたは、息子の求婚を受け入れるか」

ヴィオランテは腰をかがめる。

少し間を置いて身体を起こし、口を開く。

「恐れながら、陛下に申し上げます。私はご子息とは結婚いたしません。すっかり気持ち冷めてしまいました。陛下には、お詫び申し上げます。カルデニオ様とルシンダ様、どうぞお幸せに。そして、ドン・フェルナンド、さようなら。永遠に」

舞台上の全員が呆然とする中、ヴィオランテは広間から去る。

舞台上の全員の動きが止まる。シェイクスピアさえも。

観客席がざわめく。舞台裏でフレッチャーが怒る。ヴィオランテのために最高の科白を書いたのに――。突然、ジェイムズ国王王妃アンが立ち上がって拍手を始める。

「素晴らしい」王姫は張りのある声で言う。「ドン・フェルナンドとかいういいけすかない男、わたしは引っぱたいてやりたかった。ヴィオランテ、よく結婚を断ってくれました。国王陛下への敬意を失わなかったころも大変結構。ブラボー！」

一人で拍手を続ける妃。ヴァイオラも拍手を始める。ジェイムズ国王はそれに気づく。サウサンプトン伯が立ち上がって拍手する。女性の観客が次々に拍手に加わる。国王が拍手を始めると、満場の拍手となる。

ドン・キホーテの恰好のシェイクスピアが舞台の中心に進み出て、ハプニングが丸く収まるように締め言葉の言葉を述べる。拍手は続く。リチャードとマーガレットが前に出る。さらに大きな拍手。エドワードはカルデニオがサウサンプトン伯であることに初めて気づき、驚く。

55 サヴォイの外交使節が国王の侍従に案内されて退場する。シェイクスピアはリチャードとマーガレットに耳打ちする。二人は役者たちの後ろへ移動する。

突然、エドワードが平伏しつつ、ジェイムズ国王の前に現れる。

「畏れながら、申し上げます」とエドワード。「今宵、国王一座の中に、陛下に不敬を働いた者がおります」

「なにごとだ？」と国王。

「国王一座の役者の中に女性がおります」

「それは本当のことか？」

「間違いございません」

エドワードは舞台の方を向く。マーガレットの姿はすででない。エドワードが合図して、手下が舞台裏に回る。

「そればかりではございません。あきれ果てたことに、サウサンプトン伯を称するリチャードが、役者として舞台上に上がっていたのでございます」

「信じられぬ」

「真実でございます。カルデニオの役を演じておりました。王室に連なる貴族としてあるまじき所業でございます」

「カルデニオが……本当なら、許されぬことだ。シェイクスピア、エドワードの言葉は真実か？」
シェイクスピアはたらいの兜を外して答える。

「そのようなことが、あろうはずはございません」

フレッチャーも出て来て、否定する。

エドワードの手下が舞台下手に現れ、二人は見つからなかったと手で合図する。

「どうやら二人とも逃げたようでございます」とエドワード。「しかし、証人がおります」

別の手下が、ヴィオランテとドン・キホーテの役を降ろされた二人を連れて舞台に現れる。

「この二人はヴィオランテ役の役者が女であったことを知っております」

「本当か？」と国王。

二人は、舞台にいる一座の者たちの厳しい視線に脅えて、言葉を出せない。

「言うてみよ」国王がうながす。

「私は存じません」と元ヴィオランテ役。

「私も同様でございます」と元ドン・キホーテ役。

「本当のことを言え」怒鳴るエドワード。

二人は首を横にふる。

「証拠もなく讒言をなすとは不屈き極まる。捕らえよ」

王の命令で、衛士がエドワードと手下たちを捕縛して場外に連れ出す。

シェイクスピアはヴァイオラと目を見交わす。続いてサウサンプトン伯と視線を合わせ、微笑む。シェイクスピアは、もう一度ヴァイオラの方を見る。ヴァイオラの姿が消えている。国王もヴァイオラの方を向き、いなくなったことに気づく。

56 王宮から続く道。笑いながら走るリチャードとマーガレット。

「楽しかった」とマーガレット。

「最高だったよ」とリチャード。

「あなたこそ、最高の主役だった」

「あんな終わり方をするなんてね。結局、大受けだった」

「でも、ミスター・シェイクスピアは怒ってるんじゃないかしら」

「そんな野暮な人じゃないと思うよ」

リチャードがマーガレットの手を取る。立ち止まる。リチャードが抱き寄せると、マーガレットは受け入れる。キス。

「ヴィオランテとカルデニオじゃ不倫だね」とリチャード。

「リチャードとマーガレットよ」とマーガレット。

57 夜道。サウサンプトン伯家近く。手をつないでゆつくり歩くりチャードとマーガレット。

「今日、母上から伝言があつて、良い船が見つかったから、早めにアメリカに戻ることにするつて。弟と妹も母上を待っている」

「それはとても残念」

「母上を一人で帰すのは心配だ」

「でも、あなたはオックスフォード大学に進むのでしょう？」

「オックスフォードで学ぶことに魅力を感じないんだ」

「じゃあ、ケンブリッジにすれば？」

「そういう問題じゃなくて、大学に入るのには今ではないかな、と思つて――」

「お母様とアメリカに戻るつていうこと？」

「今回は、そうしようかと――」

リチャードの手を振り払い、早足で歩き出すマーガレット。

「ずっとアメリカに住むということじゃないんだ」追いつがるリチャード。

「船つて沈むんでしょ？ 死にそうになつたつて言つたじゃない。こちらに、いつ帰つて来るか約束できる？」

「もちろん、生きて帰つて来る」

「いつ？」

答へられないリチャード。

「ほらね。わたしはヴィオランテ。あなたはドン・フェルナンド」

「ぼくはリチャードだ」

走り出すマーガレット。

58 夜遅く。デ・レセツプス家のバルコニーの前。シェイクスピアが声をかける。やはり返事はない。木に手をかけるが、諦める。歩き出すシェイクスピア。しばらくして振り返る。バルコニーには誰もいない。

59 未明。居室の机に突っ伏して眠るシェイクスピア。

「カルデニオ」と呼びかける声が聞こえる。

「ジュリエット？」思わずそう返すシェイクスピア。

「いいえ」

「ルシンダ？」

ドアを開けると、ヴァイオラが立っている。

「わたしはヴァイオランテ」とヴァイオラ。

抱き合い、キスをする二人。

「こんな汚い部屋なんて、見たこともないだろ」とシェイクスピア。

「アメリカでは、テントで暮らしたこともあります。竜巻で家を吹き飛ばされたの」

もつれるように狭いベッドへ。

60 夜明け。シェイクスピアの部屋。帰り支度をするヴァイオラ。

「船が見つかったの」とヴァイオラ。

「なぜ、そんなに急ぐ？」

「ジェイムズ国王への対応が、いよいよ難しくなって来たの。のらりくらりでは限界に近づいている。あち

らにいたる子供たちも放っておけないし……わたしは悪い母親」

「誰も悪くなんかない」

「あなたは悪い人」

長いキスをする二人。

「リチャードはどうする？」

「役者に使うのは、もうやめてね」

「惜しいけど、ウエセックス公を何度もはね」

「あの子、わたしを一人で帰すのは心配だと言うの。だけど、大学に行かせるつもり。そのためにイングラントに戻ったのだから」

「母親思いの息子だ」

「誰に似たのかしら？」

「役者として才能があるのは確かだ」

笑うヴァイオラ。

61 港の岸壁。国王の使いの下賜する品物を受け取るヴァイオラ。それを見るリチャードとマーガレット。シエイクスピア。サウサンプトン伯。

ヴァイオラはランチに乗り、沖に停泊する大型帆船に向かう。乳母が必死の面持ちで従う。ヴァイオラと乳母は船長の出迎えを受ける。

帆に風をはらんで船が動き出す。見送る人たちと見送られる二人。カメラは次第に高く上がっていく。港から外洋に出て行く帆船。

エンドロール。

©2021レワニワ書房